

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第30集

角 江 遺 跡

平成2年度二級河川新川住宅地
関連公共施設整備促進(中小)工事に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書 第30集

角 江 遺 跡

平成2年度二級河川新川住宅地
関連公共施設整備促進(中小)工事に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

例 言

1. 本書は、浜松市入野町字角江および字町田に所在する角江遺跡の発掘調査及び確認調査の報告書である。
2. 調査は、平成2年度二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進（中小）工事予定地内埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県浜松土木事務所からの委託を受け、調査指導機関静岡県教育委員会・調査実施機関財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 平成2年度調査は、平成2年11月1日から平成3年3月31日まで行った。現地発掘調査に並行して資料整理を実施した。
4. 平成2年度調査は、静岡県埋蔵文化財調査研究所長斎藤忠・常務理事亀山千鶴男・調査研究部長山下晃の指導の下に、調査2課長栗野克己・調査研究員中山正典・小林孝誌が担当して実施した。
5. 本書の遺物写真は池田洋仁氏に撮影を依頼した。
6. 本書の執筆分担は以下の通りであり、栗野が総括した。
I、II、III 2、IV 2、
III 1、IV 1
7. 遺構の一部実測には写真測量をとりいれ、(株)フジヤマに委託し、プラントオパール分析は(有)古環境研究所に、花粉分析については(株)バリノサーヴェイにそれぞれ委託した。
8. 調査は多くの方々協力によっている。助言・指導をいただいた下記の方々はこの場を借りて深くお礼を申し上げたい。(敬称略)
加藤芳朗（静岡大学名誉教授）、向坂綱二（浜松市博物館） 佐藤由起男（同） 鈴木敏則（同）
尚、土壌学的調査は加藤先生に依頼し、その都度コメントをいただき、本文中に参照、引用させていただいた。
10. 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	1
III. 角江遺跡砂堤列付近の確認調査	
1. 調査方法と結果	5
2. 出土遺物	14
IV. 角江遺跡町田橋地区の調査	
1. 調査方法と結果	20
2. 出土遺物	24
V. まとめ	24

I. はじめに

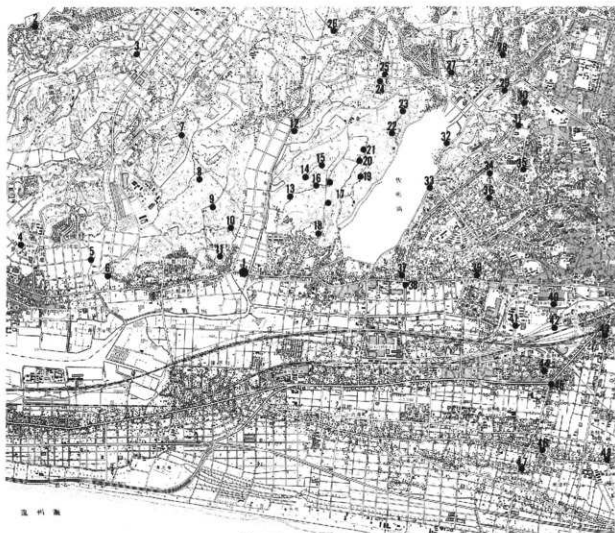
新川住宅地関連公施設整備促進工事に伴い、東神田川を佐鳴湖の新川放水路として拡幅の工事が予定された。東神田川と旧雄踏街道との交差点付近は以前より角江遺跡として、特にその交差点南西の田や畑において弥生時代中期から古墳時代にかけての土器片が表採できる場所であった。東神田川の拡幅により影響を受ける区域内で、角江遺跡の範囲を確認する必要上、平成2年度は現雄踏街道より北へ200m、南へ200mの範囲内に、50cm四方の試掘坑を掘削して確認調査を行い、それより北で梅ヶ谷橋付近までの約400mの間、10箇所ボーリング調査を行った。それに加え、河川の拡幅工事着手前に建設予定の町田橋地区の橋台部分（KA2）、橋脚部分（KP1）の調査も行った。

平成2年11月から平成3年3月までの調査であったが、概ね11月、12月の2ヶ月間を確認調査にかけ、1月、2月を町田橋地区の調査に、そして3月を整理作業に費やした。調査の大半が海抜下の作業であったため、湧水に悩まされるという調査であった。来年度以降、本調査に入る予定である地域の試掘調査は出来るだけ客観的事実記載にとどめ、町田橋地区も狭い橋脚部分のみの調査ということで、概観的な内容におわってしまうことを予め承願したい。

II. 位置と環境

角江遺跡は三方原台地の最南端で南へ細長く開く浸食谷の出口部分に位置する。この浸食谷を流れる川は本来「神久呂川」と呼ばれ、現雄踏街道より北500m程の梅ヶ谷付近で南西に蛇行し、浸食谷の出口付近では西端を流れ、つまり角江遺跡の西を流れ、東西の砂堤列を切って南流していた。東神田川は明治40年代この浸食谷一帯の耕地区画整理事業に伴い、現在のような流れに矯正された。この浸食谷は神久呂川によって開削されたものというより「洪積世の終わり頃に形成された三方原台地が、後水期の海進によって削られた海食崖」（『伊場遺跡第3次発掘調査概報』1971年浜松市遺跡調査会）と考えられている。この谷は南への出口において三方原台地南に発達する東西の砂堤列によって塞がれ、より低湿地性を強めている。「台地を刻んだ浸食谷が堆積のさかんな河川にその出口をせきとめられてつくられるタイプの低湿地」（『低湿地』竜瀬良明1972年 古今書店）がここに示されていると言えよう。この「堆積のさかんな河川」とは新川ではなく天龍川と考えることが出来る。

遺跡は南北に長く確認され、その性格上3つの区域に大別できる。第1は北に広がる谷地田型低湿地であり、第2は中央部の砂堤列上の微高地であり、第3は南に広がる砂堤列間低地である。角江遺跡がのる東西方向の微高地は三方原台地南に大小6列を数える砂堤列のうち第1列目のものである。伊場遺跡は第2砂堤列上に位置する。第1砂堤列の生成について加藤芳朗氏は「縄文時代中期ごろにはすでに第I、II砂堤列はでき上がり、第I砂堤列によって出口をふさがれた佐鳴湖や両砂堤列間低地は淡水化または低塩水化水域となっていた」（『伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的検討』加藤芳朗『伊場遺跡遺構編』浜松市教育委員会1977年）としている。縄文時代中期には角江遺跡北に延びる浸食谷は出口を第1砂堤列により塞がれ、佐鳴湖と同様、湛水したかまたは泥炭が発達するような低湿地であったはずである。角江遺跡北側に広がる浸食谷は泥炭層が厚く堆積した低湿地である。砂堤列間低地は低湿地で有機質や泥炭層、シルト層や粘土層などが堆積しており、入野町志都呂町南部、小沢渡町から新橋町にかけて著しく湿地を形成している。



遺跡分布

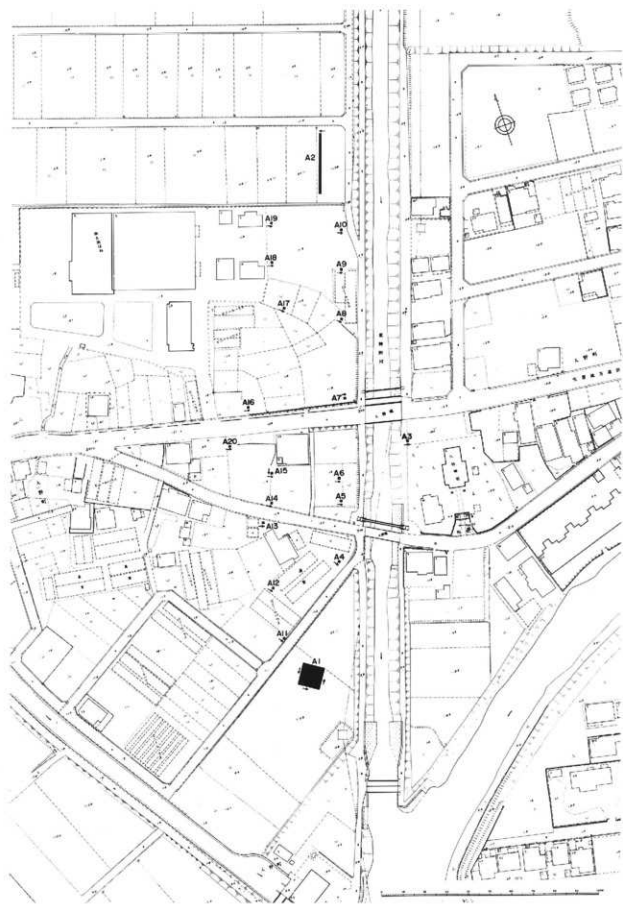
第1図 周辺遺跡分布図

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	向江	縄文(後)～平安	17	大平北	縄文(中・後)・古墳(後)	33	赤宮神	奈良
2	上の平	縄文・古墳	18	大平	古墳(前・後)	34	蛸塚	縄文(中～後)
3	長者平	縄文(後・後)	19	鎌前	弥生(後)～古墳(後)	35	熊原中学校校庭	縄文(後)
4	西之谷公園内古墳	古墳(後)	20	香原	古墳(後)	36	(未命名)	平安
5	鹿小塚	弥生(後)・古墳(前)	21	明善	縄文(中)	37	人野古墳	古墳(中)
6	西脇	弥生(後)・古墳(前)	22	柳川山古墳	古墳(後)	38	八反田	奈良～中世
7	八丁ヶ谷	縄文	23	柳川山	縄文	39	下山田	古墳(前)
8	(未命名)	旧石器	24	栗平	縄文(早)	40	熊原地区工場地内	奈良(中)～平安
9	下山	奈良	25	狐塚古墳	古墳(中)	41	城山	古墳(後)～室町
10	カサノ	古墳～奈良	26	山の神	縄文(後)	42	伊場	弥生(後)～鎌倉
11	中平	弥生(中)～江戸	27	妙法塚古墳	古墳(後)	43	両前古墳	弥生(後)
12	栗平	弥生(後)	28	栗崎古墳	古墳(後)	44	中村(栗崎林1)	奈良～平安
13	天の峰	弥生(後)～平安(末)	29	富塚地蔵平1号墳	古墳(後)	45	栗崎林(栗崎林2)	奈良(末)
14	村前山	奈良(初)～平安(初)	30	野門池	縄文(早・前)	46	新橋村東	古墳(後)
15	跡山	縄文(後)～平安	31	向平	縄文	47	堤了村東	古墳(前)
16	村前山東	奈良	32	小瀬	奈良～鎌倉	48	田尻古墳	古墳(後)

第1表 周辺遺跡地名表



第2図 角江遺跡周辺地形図



第3図 角江遺跡確認調査試掘坑配置図

Ⅲ. 角江遺跡砂堤列付近の確認調査

1. 調査方法と結果

遺物包含層の厚さとその範囲を確認するため、砂堤列上になるとと思われる現雄踏街道と旧道間の地帯をまたぐようにして、50cm×50cmの小トレンチを18箇所設定した。小トレンチ間の間隔は約10～30mにして、東神田川の現堤防に沿ってA4～A10の東列、工事範囲の西の境界線に沿ってA11～A19の西列と南北方向に2列を設定した。現雄踏街道脇の、東と西の工事範囲外にもA3とA20を設定した。また、砂堤列から南北の低湿地への地形変化と水田跡の存在を確かめるために、現街道から南へ約110mの地点に10m×10mのA1トレンチ、北へ約100mの地点に東西1m×南北25mのA2トレンチを設定した。それぞれ基本的に東壁の土層堆積状況を観察し、実測図を作成した。

A1 (第4図) 海拔約60cmの低い水田面を掘削した。土層は、東壁、北壁、南壁を観察した。3層までは、客土と認定できる黄灰色粘土が含まれている。4層は暗褐色粘質砂層で、須恵器、土師器の小片を包含する。5層、9層、12層の灰色粘土層は洪水による堆積層であろう。6層は灰褐色粘土層で、少量の古式土師器片を包含する。

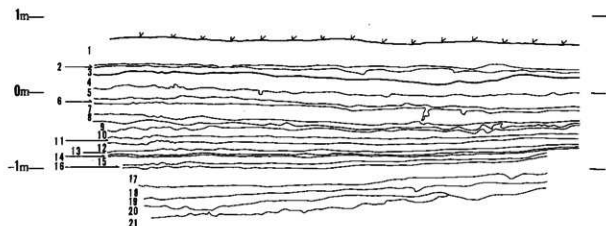
7層と8層(海拔-40cm)は泥炭質を含む粘土層で、多数の弥生土器片を包含する。7層には東壁で数ヶ所ピット状の断面が認められる。北壁と南壁には、8層の時期に対応する大きな溝状遺構の断面が現われた(第5図)。北東から南西の方向で、幅10m以上、深さ1m程の規模と考えられ、東岸には堤状の高まりがある。図中の溝覆土3を中心に多量の弥生土器片が出土し、8層出土の土器と同様に弥生時代中期瓜瓣式から長床式併行段階のものであった。また、溝覆土3の下層からは、鍬や槽といった農具等の破片が出土した。周辺にこの時期の水田跡の存在が想定される。このトレンチを掘削中、明確なレベルはつかめなかったが、溝覆土中より、舟形木製品、石斧の柄といった木製品、磨製の蛤刃石斧等の石器類も数点出土している。溝状遺構が人工的なものなのか、自然流路なのか、明確に判断しかねるが、本調査に期待したい。

10層、11層は、泥炭質の強い粘土層で、ごく少量の弥生土器片を包含していた。12層から16層までは泥炭層で、このうち14層(海拔90cm)に大沢スコリア、15層にカワゴ平パミスが確認され(註1)、この泥炭層が約2700年前前後の時期に形成されたことがわかった(註2)。17層以下は、未分解の植物を含む褐色シルトと砂の互層構造である。20層と21層の間(海拔-1.7m)からは縄文晩期初頭の深鉢片が出土した。

なお、東壁において、イネのプラントオパール分析を行ったところ、4層、5層、6層、8層で高値が得られた(第2表)。土層断面で遺構の可能性の高い7層とともに、水田遺構の可能性が考えられる。

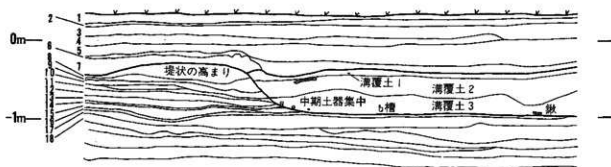
A2 (第8図) 現雄踏街道から北へ100m離れた海拔約70cmの水田面を掘削した。北へ25mトレンチを伸ばし、西壁の土層を観察した。深さ25cmの2層までは客土であろう。3層は茶色砂質粘土層である。4層は黒褐色、5層は暗褐色の砂質粘土層である。6層は黒灰色、7層は暗灰色で、ともに泥炭混じりの砂質粘土層である。基盤の砂層は、南端で海拔-15cm、北端で-30cmからで、北に向ってなだらかに低くなる地形変化がみられる。

遺物の出土はなかったが、イネのプラントオパール分析で、4層と5層から高値が得られ(第2表)、水田耕作土の可能性は考えられる。



- A1トレンチ基本層序 1. 灰色粘土 (表土) 12. 灰色粘土
 2. 茶灰色粘土 (客土) 13. 泥炭・植物混じり黒灰色砂質粘土
 3. 茶色砂質粘土(客土) 14. 大沢スコリア
 4. 暗褐色粘質砂 15. 泥炭・植物混じり黒褐色砂質粘土
 5. 灰色粘土 16. 未分解植物混じり灰褐色砂質粘土
 6. 灰褐色粘土 17. 未分解植物混じり褐色シルト
 7. 泥炭混じり暗褐色砂質粘土 18. 未分解植物混じり暗灰色砂
 8. 泥炭混じり灰褐色粘土 19. 未分解植物混じり褐色粘質砂
 9. 灰色粘土 20. 未分解植物混じり暗灰色砂
 10. 泥炭混じり茶黒色粘土 21. 未分解植物混じり褐色砂質粘土
 11. 泥炭混じり黒色粘土

第4図 A1トレンチ東壁土層図 (1/50)



- 1-18. 基本層序に同じ 18層より下層は粘質砂と砂の互層
 清覆土1. 泥炭・砂混じり暗褐色砂質粘土
 清覆土2. 褐色粘質砂(木片・未分解植物多く含む)
 清覆土3. 茶褐色砂(木片・未分解植物多く含む)

第5図 A1トレンチ南壁土層図 (1/50)

A 3 東神田川の東岸で1箇所土層観察したが、深さ2m近くまで客土されていた。

東列

A 4 (第6図) A1から北へ35m、一段高くなった畑の中を掘削した。4層まではビニールが含まれ、客土とわかる。5層は暗褐色粘質砂層で、須恵器、土師器片を出土した。海拔14cmから下が砂層となる。

A 5 (第6図) 現雄踏街道と旧道間の茶畑を掘削した。深さ50cm、2層までは近現代の畑土であろう。3層は泥炭質を含む暗褐色粘質砂層で、ピット状の遺構断面がみえる。A4の5層と対応しそうである。4層は泥炭質の強い黒褐色粘質砂層である。3層と4層から土師器や弥生土師の小片が30片程出土している。海拔55cmから下が砂層である。

A 6 (第6図) A5から北10mの位置である。2層には、竹の杭が打たれており、茶畑にされる前の近現代の畑土であろう。3層は暗褐色粘質砂層、4層は泥炭混じりの黒茶褐色粘質砂層で、A5の3層・4層と対応する。3層から2片の土師器小片が出土した。砂層のレベルは海拔90cmで、砂堤列の高まりのピークはこの辺りにありそうである。

A 7 (第6図) 現雄踏街道のすぐ北脇の畑の中を掘削し、西壁の土層を観察した。4層は、50cmと厚い褐色の粘質砂層で、様々な時期の土器細片を多く含んでいる。客土された可能性が高い。5層は暗褐色、6層は灰黒色の砂質粘土層で、ともに土師器片を包含している。6層には泥炭質が強い。なお、4層の客土にともなうであろうか、5層、6層は激しく巻き上げられている。砂層のレベルは海拔70cmであった。

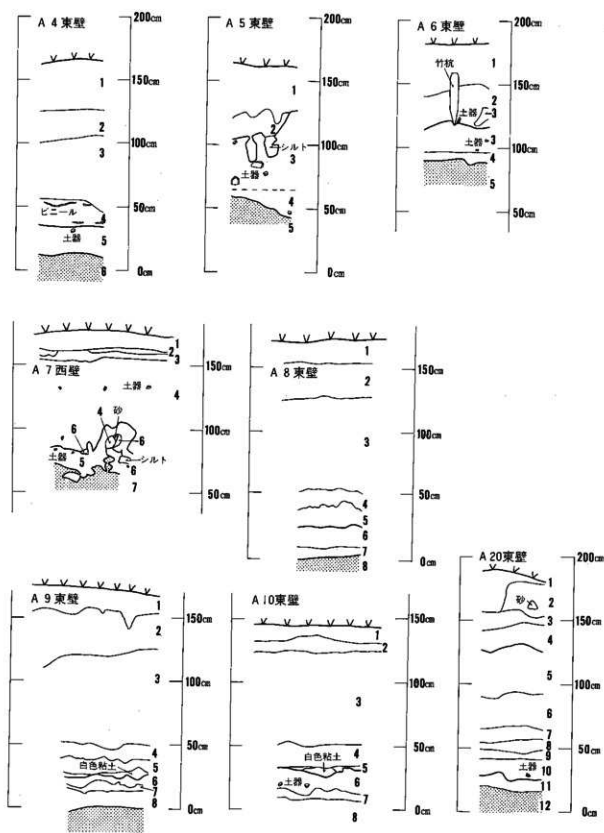
A 8 (第6図) 深さ145cm、5層まで客土であろう。6層は灰黒色粘土層、7層は暗灰色砂質粘土層である。遺物の出土はなかった。砂層は海拔0mから下で、A7とA8の間に砂堤列の北端部があることが予想される。

A 9 (第6図) 深さ135cm、5層まで客土であろう。6層は暗灰色砂質粘土層、7層は泥炭を含む灰黒色粘土層、8層は暗灰色砂質粘土層である。7層と8層は、A8の6層と7層に対応すると思われる。遺物の出土はなかった。砂層は海拔0mから下である。

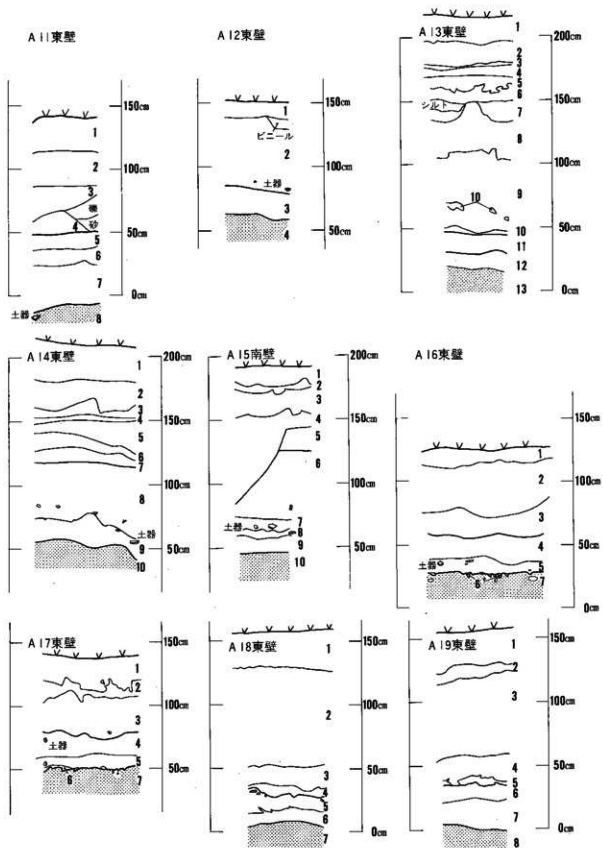
A 10 (第6図) 深さ115cm、5層まで客土である。6層は暗灰色砂質粘土層で、須恵器、土師器が1片づつ出土した。7層は泥炭を含む灰黒色粘土層、8層が暗灰色砂質粘土層である。6層、7層、8層はそれぞれ、A9の6層、7層、8層に対応する。7層、8層からの遺物の出土はなかった。トレンチ内の湧水量が多く、砂層のレベルは確かめることができなかった。また、8層は、北へ15mの位置にあるA2の8層とも対応しそうである。

西列

A 11 (第7図) A1から北へ14m、一段高くなった畑の中を掘削した。4層は山土を含み、客土と思われる。5層、6層、7層は、ともに褐色系の粘質砂層で、下層ほど泥炭質が強く、色が暗くなり粘性も弱くなる。7層の下層、砂層との境目付近より須恵器の小片が出土している。海拔-10cmより下が砂層となる。



第6図 角江道跡砂堤列付近トレンチ土層図 (1/30)



第7図 角江遺跡砂堤列付近トレンチ土層図(1/30)

A12 (第7図) 2層は茶褐色粘質砂層で、灰粘陶器片を出土したが、小礫を含み、攪拌されたような状況で、客土の可能性がある。3層は褐色粘質砂層で、須恵器、土師器片を包含している。砂層のレベルは海拔50cmから下で、A11より60cm上がっており、砂堤列の南端部がA11とA12の間にあることが予想される。

A13 (第7図) 旧道の南脇の宅地を掘削した。地表面が海拔215cmである。深さ170cmまで厚く客土されている。11層は暗灰色砂質粘土層で、遺物は出土しなかった。海拔30cmから下が砂層である。

A14 (第7図) 旧道のすぐ北側を掘削した。7層までは、現代の瓦が含まれ、確実に客土だが、8層の茶褐色砂質粘土層も客土の可能性がある。9層は暗褐色の砂質粘土層で、8層と9層の境目あたりから、7片の土師器片が出土した。9層には、断面の盛り上がる部分があり、何らかの遺構の可能性がある。海拔55cmから下が砂層である。

A15 (第7図) 6層、7層、8層から土師器片が出土している。6層は50cmと厚い茶色砂質粘土層で、攪拌された状況がみられ、トレンチの東側では深く掘削されている。客土の可能性が高い。7層と9層は暗褐色の砂質粘土層で、その間にはさまれたように、焼土のような黒色の8層がある。砂層は、海拔45cmから下であった。

A16 (第7図) 現雄踏街道のすぐ北側の畑の中を掘削した。3層までは、ビニールが含まれ客土である。4層は暗褐色砂質粘土層で、A14の9層、A15の7層に対応する。5層は、泥炭質を含む灰黒色砂質粘土層で、6層の黒色泥炭を巻き上げているような状況である。5層からは土師器片が出土した。海拔28cmより下が砂層であった。

A17 (第7図) 3層の褐色砂質粘土層は、礫を含み、攪拌された状況で、客土の可能性が高い。4層は暗褐色の砂質粘土層で、5層は泥炭質を含んだ灰黒色砂質粘土層、6層は黒色泥炭である。4層以下の堆積状況は、そのままA16に対応する。3層、4層、5層に土師器、須恵器片が包含されていた。砂層はここでいったん高くなるようで、海拔50cmのレベルであった。

A18 (第7図) 深さ130cm、4層までが客土である。5層は黒灰色の砂質粘土層、6層は泥炭を含む灰黒色粘土層である。6層はA17の5層と対応する。砂層は海拔10cmから下で、砂堤列の北端部はA17とA18の間になりそうである。

A19 (第7図) 深さ120cm、5層までが客土である。6層は黒灰色の粘土層、7層は泥炭を含んだ灰黒色粘土層で、A18の5層、6層と対応しそうである。海拔0mから下が砂層であった。

A20 (第6図) 雄踏街道のすぐ南脇で、A15から西へ約20m離れた地点である。4層までは確実に客土とわかるが、5層の褐色粘質砂層、6層の暗褐色粘質砂層も客土の可能性がある。7層と8層は褐色粘質砂で、7層には灰色の砂が混じっている。9層と10層は暗褐色砂質粘土で、10層には泥炭質が含まれており、A15の7層から9層までの状況と似ている。5層、6層、10層から土師器、須恵器片が出土した。砂層は海拔30cmから下で、A14・15から西へは旧地形が低くなっているようである。

A 1 東壁				A 2 南端		北端	
採取層	個/g			採取層	個/g	採取層	個/g
3層	5,000	8層上層	5,300	3層	3,300	3層	3,300
4層上層	8,700	下層	3,100	4層	2,900	4層	6,300
下層	3,300	9層	0	5層	600	5層最上層	4,900
5層上層	7,500	10層上層	2,400	6層	0	上層	4,800
下層	1,600	下層	800			下層	4,000
6層	8,200	11層	0			最下層	600
7層上層	4,200	12層	0			6層	0
下層	2,700	13層	0				

第2表 確認調査におけるイネのプラントオパール分析結果 (古澤環研究所による)

砂堤列の周辺は、予想以上に客土が厚く、客土に伴う攪乱も深く及んでいるようであった。おおよそ対応しそうな部分のみ(大きく7種の層に分けた。)をつなげて、各トレンチの土層の模式図を並べてみた(第9図～第11図)。最下層の砂層のレベルからは砂堤列の断面を復元できそうである。

砂堤列のピークは現雄踏街道と旧道の間であり、そこから北へはなだらかに低くなっていき、南へは急に低くなるようである。この南の斜面下には、A1で確認された溝があると考えられ、対岸には堤状の高まりがつくられているのではないだろうか。東列と西列の断面の比較から、砂堤列の高まりは西へいくと南北に広がるように低くなっていくようである。平面図に砂層のコンターを推定して入れてみた(第12図)。現在の東神田川のあたりから、砂堤列は西へ手掌状に広がり、次第に低くなっていくと考えられる。当時の河川が、現在の境川あたり(入野町と西鶴江町との境)を流れていたと考えられ、そこで砂堤列が切られて地形を変化させているのではないだろうか。

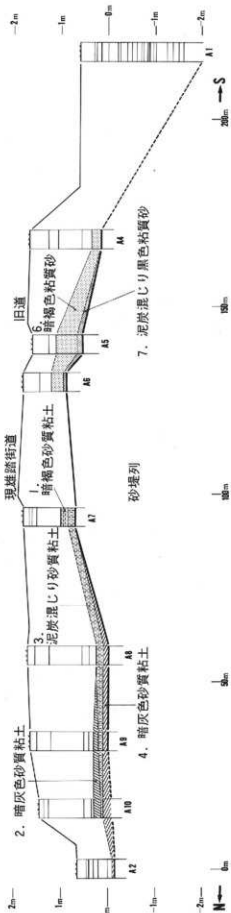
砂層から上の層については、各トレンチ間の細かい対応関係がはっきりしないものの、約20～40cmの厚さの遺物包含層が存在するようであった。A1で確認された溝とともに本調査での遺構の検出が期待される。

註 1. 静岡大学名誉教授加藤芳朗氏の御教示による。

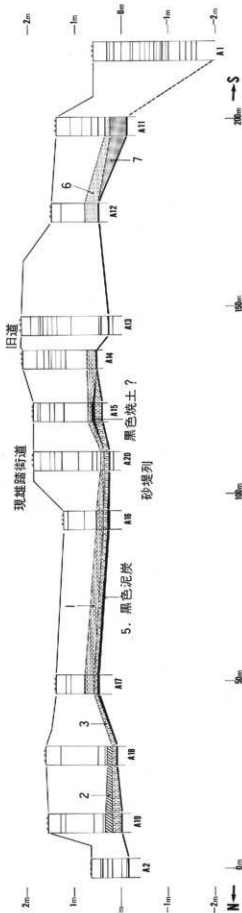
2. 泥炭質のC14年代測定を学習院大学年代測定研究室にお願した。1950年からの年数で、ワゴ平バミスを含む15層は3030±80、縄文土器の出土した層直下の21層は3290±100という報告を得ている。



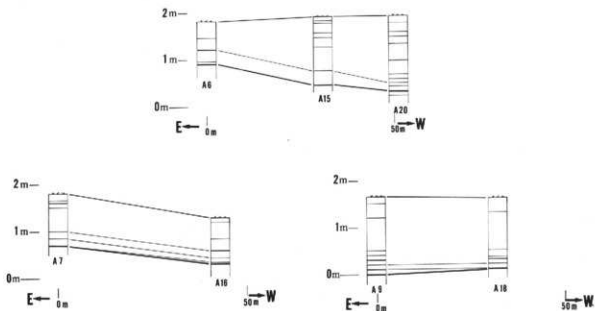
第8図 A2トレンチ西壁面土層図 (1/25)



第9図 砂堤列付近トレンチ土層対応推定図 南～北 東列 (垂直1/80・水平1/1000)



第10図 砂堤列付近トレンチ土層対応推定図 南～北 西列 (垂直1/80・水平1/1000)



第11図 砂堤列付近トレンチ土層対応推定図 東～西（垂直1/80・水平1/1000）



第12図 角江遺跡砂堤列付近基盤地形推定図（1/2500）

2、出土遺物

角江遺跡の確認調査においては試掘坑A2よりA20からは弥生・古墳・歴史時代等の極少量の土器片しか出土しなかった。ところがA1は丁度旧流路に当たり、テンバコ5箱分の土器片（大半が弥生中期の土器片）、13点の木製品及び5点の石製品が出土した。A1出土遺物を報告する。

1) 土器

<縄文土器> A1の20層暗灰色砂層より条痕文系土器片が8点出土した。第13図1は波状口縁になる深鉢の胴部より口縁にかけての破片である。外面は二枚貝の腹縁による条痕で調整されている。2は底部より胴部への立ち上りの部分である。3～5は胴部片である。

<弥生土器> A1の8層を切り、7層により被覆された旧流路より土器片が多数出土した。土器片は互いに接合できるものは殆どなく、小片であるため、部分的に実測できたのは10点にとどまった。あとは拓本と断面を示すのみである。ここでは拓本の取れたほぼ総てを図示した。

壺口縁部 6は唯一実測可能であった受け口状口縁である。口縁外面には2条の連弧文が廻り、口縁屈曲部の端部には竈による刺突が廻る。7、8は口縁にかけて外反する広口壺で頸部より上に竈による揆ね上げが施されている。12・13は外に開かない単純口縁壺である。14は片口の浅鉢で、口縁外面には竈で緻密に斜格子文があり、内、外面ともに丁寧な竈磨きが観察できる。15は唯一認められた無頸壺である。17・18は竈による、19・20は櫛による揆ね上げが頸部より口縁部に向かって施される。22～24は壺の口縁とも思われるが、若干の受け口状をなし、口縁外面は24では鋸歯状文が竈描きされている。

壺体部片 外面の施文、調整方法によって以下のa)～o)に分けて示す。

- a) (27～29) 竈描きで区画された幅の狭い横線帯をもつ。特に27は文様帯と文様帯との間に研磨された無文帯をおく(a-1)。無文帯をおかないもの(a-2)と区別されよう。
- b) (30～48) 斜格子文。30～33は研磨された無文帯を横位にもつ(b-1)。34～38は竈による沈線で区画された横位の斜格子文である(b-2)。39～48は斜格子文が幅広く施されていると思われる。
- c) (49～57) 連弧文。49～57は竈状の施文具で描かれ(c-1)、特に49は一条の竈描きである。56、57は櫛により連弧文が描かれている(c-2)。51、53、54は櫛描横線文と組み合わせられている。
- d) (58～61) 連弧文を上下に重ねて波状文にしたもの。3～4条を一単位とする。58は深く沈線状を呈しているが、61はほとんど櫛描の波状文に近い文様となっている。
- e) (62～66) 細かい櫛状施文具を肩部から下へ若干斜めに引き下ろす。下地には横位の櫛描文がある。
- f) (67～72) 横位の櫛描波状文。68は波状の振幅が小さく(f-1)、70は振幅が大きい(f-2)。68を除けばいずれも櫛描の横線文と横位の波状文とが交互に位置する文様が肩部から胴部に施される。
- g) (73～78) 縦位の櫛描波状文。いずれも櫛描横線文の上に3条を基本単位に施される。振幅は小さい。
- h) (79～95) 櫛描横線文の上に縦位の竈または櫛描文。79、83は縦位の竈描文であり、他は2～10条ほどの櫛状施文具による縦位の櫛描文である。
- i) (96～110) 櫛描横線文の上に縦位に櫛状施文具で下から上へ刺突、はねあげを施したもの。96は2条を単位とし1列縦位に並べ、105は3条を単位として3列に並べている。
- j) (111～120) 櫛描縦線文の上に櫛描横線文を施したもの。116、117は2条単位の横線文である。119、120

は縦位の刷毛状施文の上に櫛描横線帯を設けている。

k) (121~123)横位の沈線を等間隔に施している。櫛というより篋状施文で広い範囲に横線を施す。

l) (124~126)縦位にやや斜めに竹管文を並べる。124は櫛描横線帯の下においでいる。

m) (127~130)頸部付近に貝殻肋条による刺突を加えた突帯を貼りつけている。129、130はその上、または下に太い沈線を廻らしている。

n) (131~132)縄文と太い沈線を組合せ。131は太い沈線を連弧文状にひいたその間を縄文帯にしている。

o) (133~134)羽状の条痕文。壺の胴部に横位に施された羽状条痕文と考えられる。

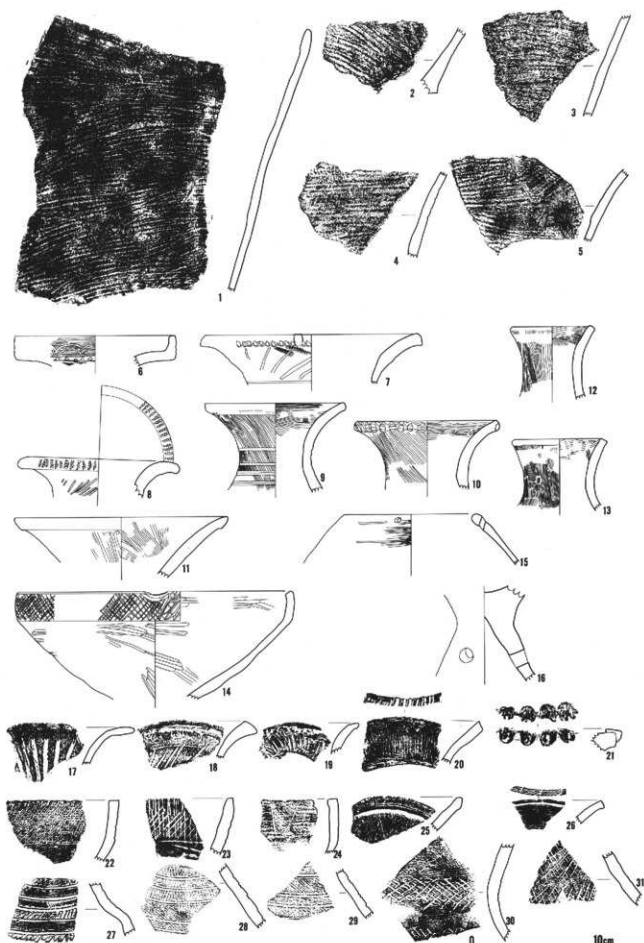
p) その他 136は櫛描を横位にひくとき等間隔に一度止めては押し引いて描いている。137は横線帯の下に篋状施文で刺突文を縦位に施している。138は篋で描かれた複合鋸歯文である。

深鉢形土器片 口縁部が最大径となる鉢形土器で、胴部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。外面は条痕仕上げが基本と考えられる。139、140は大きくゆるやかに口縁部にむかって外反し、端部を肥厚に丸くしている。口縁部内面は残存状態が不良でよく観察できないが、ナデられているようである。141~145は口縁部外側に突帯状の粘土帯を貼り、篋状工具で刻みを施している。146~158は口縁部をやや肥厚させ、刻みを入れている。156は指頭による刻みであろうか。外面調整は明らかに条痕仕上げと思われる。139、151もあれば、刷毛目とも見える157、158もある。

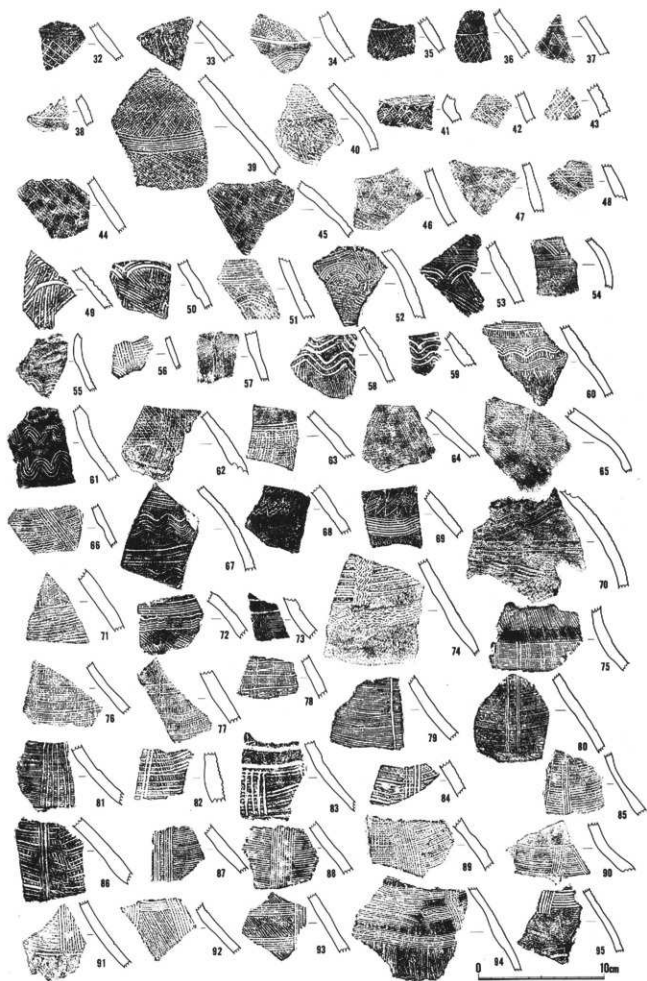
以上土器片はいずれも小片で、器形全体の様相が把握できるものはない。しかし、従来の三河地方の弥生時代中期の瓜郷式、下長山・古井式、そして長床式土器の特徴を念頭におくと、壺口縁の7、8壺体部の施文、調整方法のa-1、b-1、c-1、e、m、n、oおよび深鉢形土器の129、130は瓜郷式もしくは瓜郷併行期の特徴とみなすことができる。また櫛描が卓越することや、f 2など新しい要素も含まれている。いずれにしても時期幅はあるものの従来弥生時代中期後葉に位置付けられている、下長山・古井式と呼ばれる土器群の特徴を示す土器片が多いことはいえる。

2) 木製品 A1 試掘坑より出土した。1は膝柄鉄の身である。膝柄を緊縛する突起部分が欠損している。浜松市梶子遺跡でも膝柄鉄が出土しているが、初期農耕の農具として注目に値する。2は1のような膝柄鉄に装着すると考えられる膝柄の屈曲部片である。屈曲部先端は縄状のもので緊縛するために抉りを入れている。身との接面はフラットに削っている。3は太型始刃石斧の柄である。石斧を装着する穴の下部が残存しているため石斧の柄とした。4、5、6は舟形木製品である。4はやや大形で、丸木舟の忠実な模造と考えられる。5は棒状の木片の中央部を切り舟形としている。6は船首部分を一段高くしており、丸木舟の模造というより準構造船または構造船の模造とも考えられる。7はアカカキ状の把手つき槽である。木製品に関しては、1、2、3、4、7は7層に被覆された旧流路内の出土で、伴出土器は上記の弥生中期後半の土器群であった。この5点に関しては、この時期のものであろう。5、6は残念ながら重機による掘削中の排土より出てきた遺物であるため、年代観は示せない。

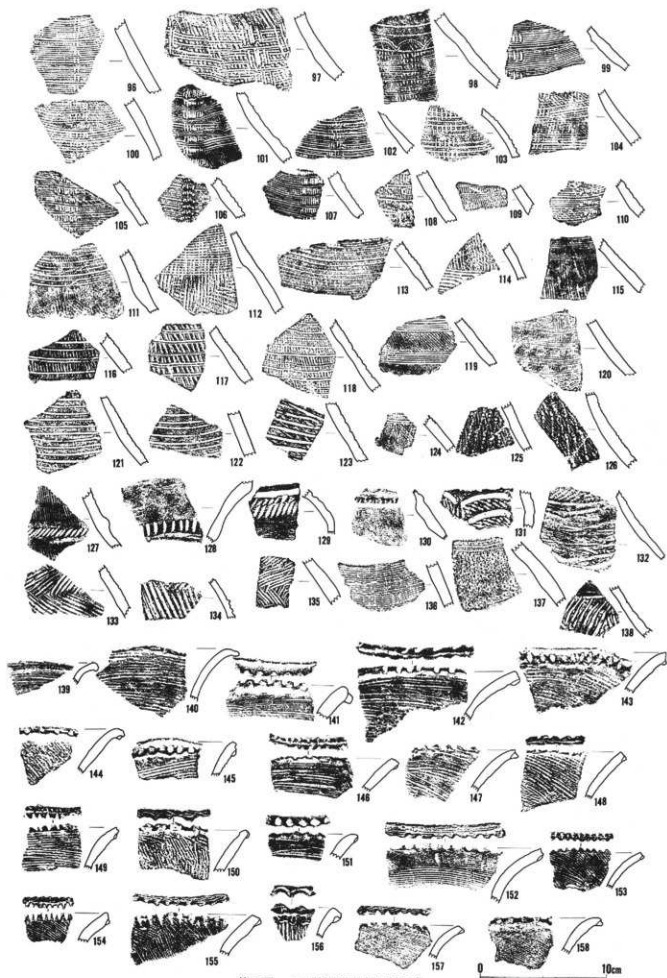
3) 石製品 A1 試掘坑、旧流路内より出土した。1は遠州式の乳棒状磨製石斧である。刃縁は潰れており前主面側にははっきりした使用痕が観察できる。2は太型始刃石斧の基部である。基端部には一面に敲打痕が残る。3、4は敲石で、棒状の自然礫の先端部分を使用している。いづれも敲打部だけでなく、側縁の一部にも敲打痕が残る。



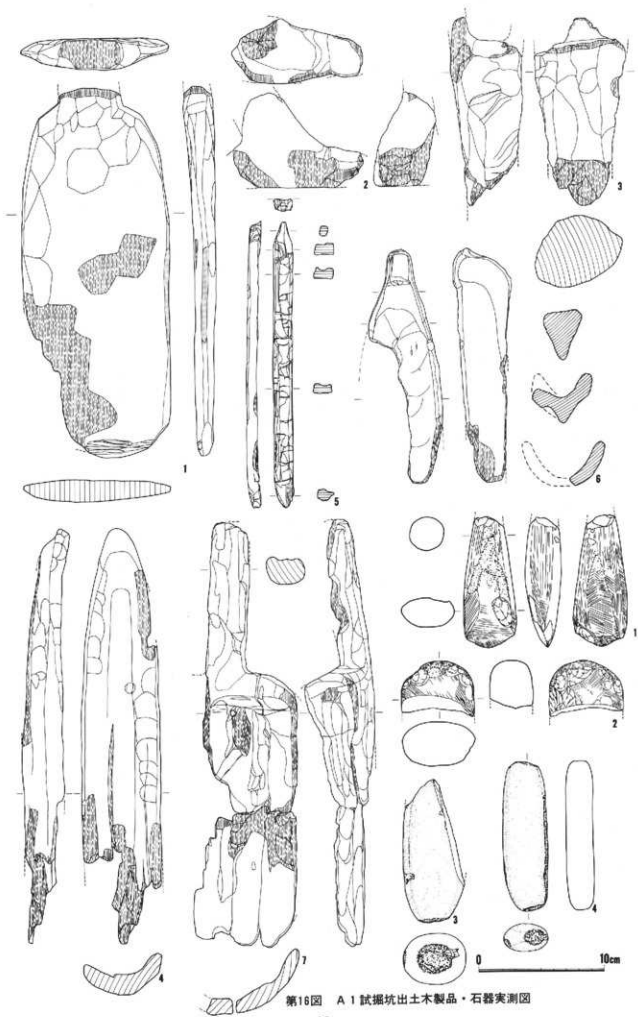
第13圖 A 1 試掘坑出土土器実測圖及び拓影



第14圖 A 1 試掘坑出土土器拓影



第15圖 A 1 試掘坑出土土器拓影



第16图 A 1 试掘坑出土木製品・石器実測図

Ⅳ. 角江遺跡町田橋地区の調査

1. 調査方法と結果

確認調査のA2トレンチから、東神田川西岸を北へ450mまで、約50m間隔で10箇所のボーリング調査を行った。このうち、イネのプラントオパール分析で高値を示す部分があり、水田跡の存在が考えられた。そんな折、現雄踏街道から350m北の地点で、東神田川に橋（町田橋）を架ける工事が始まることになり、地中を掘り込む橋脚・橋台部分の発掘調査を行った。東岸の橋台部分をKA1、西岸の橋台部分をKA2、中央の橋脚部分をKP1として（第18図）、まずKA2をオープンカットで発掘し、KP1は鋼矢板が打ち込まれた後に発掘した。KA1では工事の立ち会いを行った。KA2では壁面に勾配を設け、KP1では支保工を設置して、安全を考慮しながら掘り下げた。海拔下マイナス2m近くまで掘り下げたため、地下水の湧出が激しく、四周に排水溝を切り、ポンプで絶えず水を汲み出した。排水溝壁面で土層を観察しながら、一層毎に重機または手掘りで平面を検出していった。

KA2 西岸橋台部分

海拔約30cmの水田面に、東西15m、南北25mの調査区を設定した。排水溝断面の土層を観察（第17図）し、大正時代に客土されたという3層の青灰色粘土までは重機で掘り下げた。4層（海拔-10cm）は、暗灰色の砂質粘土層である。表面は、現代の農業用水管の敷設や客土にともなう攪乱が激しく、調査区中央を東西に横切っていた農道の重みで、全体的に地層が沈降していた。調査区南西に南北方向の水田畦畔が認められたが、ちょうど農道の下にあたる部分でみえなくなる。現代の水田の南北方向の畦畔と同じ方向である。調査区北端には、東西方向、帯状に周囲より地形が一段低くなる部分があり、粗朶を敷いた遺構があった。針葉樹が小枝を切りはらわれずに一定方向に並べてあった。客土の過程で敷き込まれたのだろうか。現在の農道と平行した方向ということを見ると、客土以前の水田の農道下に敷き込まれたものとも考えられる。いずれにしても、大正以前でも新しい時期の水田であろう（第19図）。

5層の泥炭層を除去すると、6層（海拔-45cm）は、泥炭質の強い灰黒色シルト層である。5層から6層上面にかけて、イネのプラントオパールは高値を示し（第3表）、6層も水田跡の可能性が考えられた。調査区北端に、4層と同様、東西方向に周囲より低い部分があり、粗朶が敷かれていた（第20図）。ただ4層と異なり、広葉樹の細い枝を何本も揃えて束ねたものを一定方向に隙間なく並べたような状況であった。加工された木片も数点含まれ、大足の部材らしきものもあった。これも農道・畦畔下に敷き込んだものであろうか。ただ、盛土らしきものがなく、粗朶が揃っていること等を考えると、湿地上を歩かためた木道のようなものなのかもしれない。他に遺構は認められず、4層と同様、時期を特定できる遺物の出土はなかった（註1）。

6層を掘り下げる途中、その下層（海拔-60cm）にも木材を並べたような遺構が検出された（第21図）。4層、6層上面のものとはずれて、調査区中央よりやや北の位置にあり、枝をはらった、直径10cm程の広葉樹の幹を東西方向に1本づつ直列に並べている。幹は、樹皮をつけたままだが、両端は加工され、前後の幹と組み合わせるようになっていた。これも畦畔の芯材あるいは木道なのであろうか。しかし、6層下層以下ではイネのプラントオパールは全く認められなかった。

7層(海拔-80cm)から18層(海拔-165cm)までは、未分解の植物を多く含む泥炭層である。海拔-1mのレベル、9層中に大沢スコリアが確認され(註2)、9層以下が約2700年前より古い時期であることがわかった。平面的に遺構や遺物の配列は認められなかったが、12層(海拔-115cm)から18層にかけて、数十点の石、木片、そして縄文土器片が出土した。石は、12層から出土しはじめ、13層から15層(海拔-120~-140cm)に集中していた。こぶし大ほどの大きさで、半分に割れたものも多かった。木片は、13層から出土しはじめ、14層から16層(海拔-130~-150cm)に集中していた。焼けた痕跡のあるものが多く、一部加工された可能性のあるものもあった。縄文土器片は、14層から出土しはじめ、16層から18層(海拔-150~-165cm)に集中していた。条痕をつけたものが多かったが、口縁部に巻き貝で沈線をつけたものもみられた。後期末葉あたりの時期が与えられようか。石と焼けた木片の存在から、野外の炉のようなものが考えられたが、平面的なプランらしきものは認められず、石と木片、土器片、それぞれの集中するレベルが少しづつ異なっている(第22図)。

海拔-165cm、19層より安定した灰色粘土層となり、20層、21層と次第に砂が含まれていき、海拔-270cm、22層より基盤の砂層となった。

KP1 中央橋脚部分

土層の堆積状況はKA2と同様であった(第23図)。しかし、KA2で平面を調査した4層、6層上面、6層下層には、遺構らしきものは認められなかった。7層から18層までの泥炭層からは、土器の出土は全くなかったが、数点の木片と小さな石が散在していた。木片には、KA2と同様に焼けた痕跡のあるものがみられた。

KA1 東岸橋台部分

工事中、掘削に立ち会ったが、遺物の出土はなかった。東へ行くほど19層のレベルが高く、泥炭層は薄くなることがわかった。

- 註 1. 泥炭質・木片のC14年代測定を学習院大学年代測定研究室にお願した。1950年からの年数で、5層は1310±90、7層は1610±80、13層は2760±90、15層は3140±100、16層は3520±150、18層は3790±90という報告を得ている。
2. 静岡大学名誉教授加藤芳朗氏の御教示による。

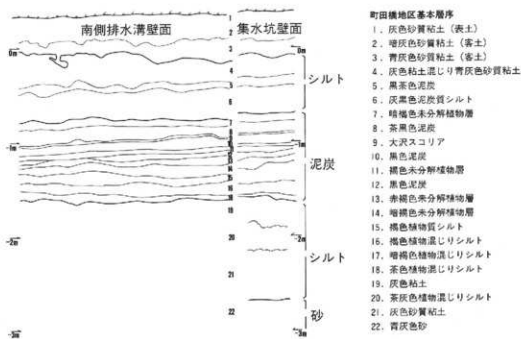
KA2	
採取層／g	
4層上層3,200	
下層6,800	
5層 5,000	
6層上層2,500	
中層 0	
下層 0	
7層 0	
8層上層 0	
下層 0	
9層 0	
10層上層 0	
下層 0	
11層 0	
12層 0	

第3表
KA2層位における
イネのプラントオ
パール分析結果
(古事類研究所による)

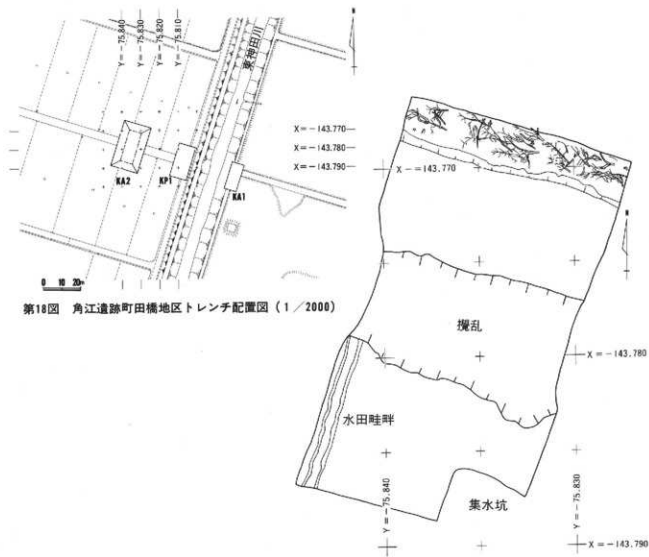
2. 出土遺物

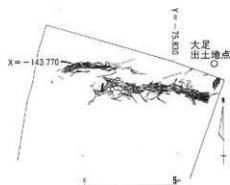
KA2の調査では、6層の灰黒色泥炭質シルト層より大足の足板(?)と思われる木製品が出土した。他は12層~18層より握り拳大の礫群、炭化した木片とともに縄文土器片が10数点出土した。大沢スコリア層より上は時期がうかがえる遺物は出土しなかった。KP2からは遺物の出土はなかった。

<縄文土器> 拓本のとれた土器片は14層~18層出土である。1~11は口縁外側に太い沈線を3条を基本とし横位に施している。巻貝による太い沈線を観察でき、器面は条痕調整である。1、2、7は沈線が太く明瞭であるが、6、8、12のそれは粗雑で、細く、浅い。6は3条の沈線の下から胴部にかけて屈曲する。9も2条の沈線の下部より下へ屈曲する深鉢形土器片と考えられる。縄文後期末(宮滝式併行)の時期と考えてよいだろう。

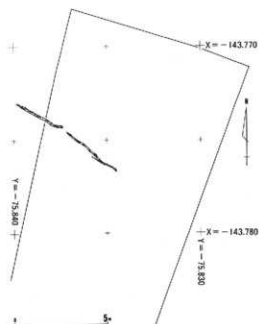


第17図 町田橋地区 K A 2 南側排水溝壁面土層図 (1/40)

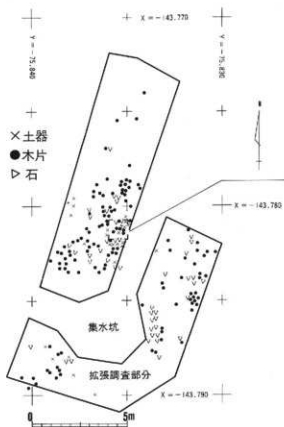




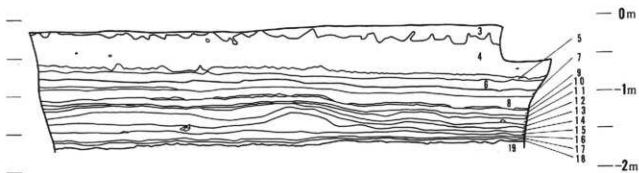
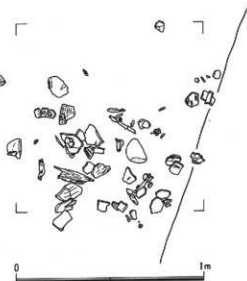
第20图 KA 2 6層上面遺構平面図 (1/200)



第21图 KA 2 6層下層遺構平面図 (1/200)



第22图 KA 2 12~18層遺物出土分布図 (1/200)
遺物出土状況図 (1/20)



第23图 町田橋地区KP 1 北壁土層図 (1/50)

〈木製品〉 1は18層出土の加工木片である。2は6層から出土しており、上端と下端に緊縛用の穴が空き、足を固定させるためと思われる穿孔が5つある。この木製品は従来の報告を踏襲すれば大足の足板となるであろうが、はたして杵型の大足の部材となるか、最近発見されつつある輪カンジキ型の田下駄の部材になるかは今後の類例および研究を待つしかないであろう。



第24図 KA 2 出土土器拓影及び木製品実測図

V. ま と め

平成2年度調査においては、ボーリングのサンプルからは客観的なデータが得られなかったが、砂堤列付近の確認調査、及び町田橋地区の調査により以下のことが把握できた。まず砂堤列付近は、東西の砂堤列上に包含層が確認され、表採資料により弥生時代中期からの遺構の検出が期待できよう。砂堤列より南側では、大量の土器片、木製品、石器等の遺物が含まれている大きな自然流路、または水田遺構の、検出が予想される。北側ではやはり生産域としての水田が広がるであろう。

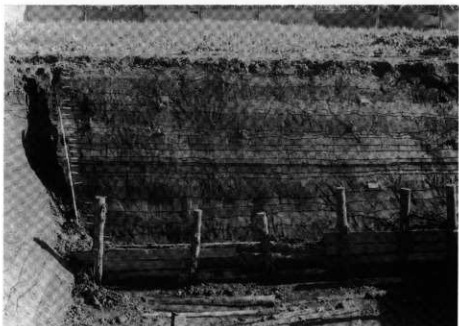
町田橋地区の調査では上層（4層～6層）の遺構についてはその所属時期、遺構の性格を捉えきれなかった。下層（12層～18層）について縄文時代後期のキャンプ的生活が営まれたと考えられる遺物の集積箇所を検出することができた。

图 版

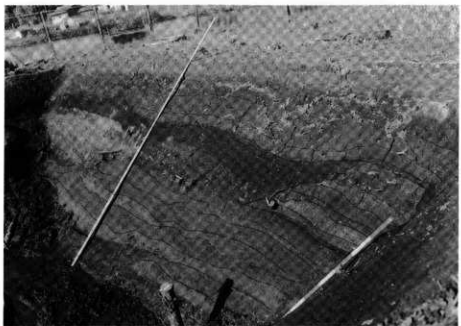
1. 角江遺跡砂堤列付近全景
A1トレンチ（南から）



2. A1トレンチ東壁面土層



3. A1トレンチ北壁面土層





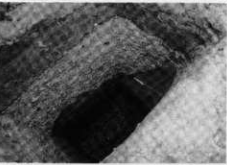
4. A2トレンチ西壁面土層



左5. A5トレンチ東壁面土層
右6. A6トレンチ東壁面土層



左7. A7トレンチ西壁面土層
右8. A11トレンチ東壁面土層



左9. A15トレンチ南壁面土層
右10. A16トレンチ東壁面土層



左11. A17トレンチ東壁面土層
右12. A10トレンチ東壁面土層

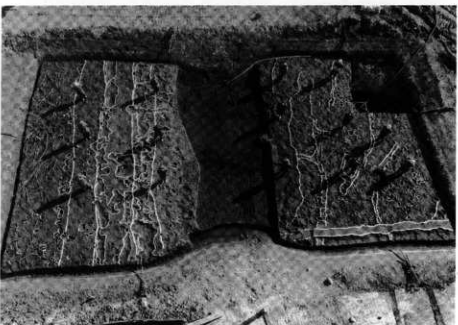
13. 角江遺跡町田橋地区全景
(南から)



14. 橋台部分KA2南側排水溝
土層 (南から)



15. KA2 4層上面遺構全景
(西から)





16. KA2 6層上面遺構
(西から)



17. KA2 6層上面木製品
出土状況 (大足部材か)



18. KA2 6層下層遺構
(西から)



19. KA2 6層下層遺構
加工部分

右上20, KA2 12~18層中
縄文土器・木片出土状況



左21, KA2 12~18層中
石・木片出土状況



右下22, KA2 12~18層中
縄文土器出土状況

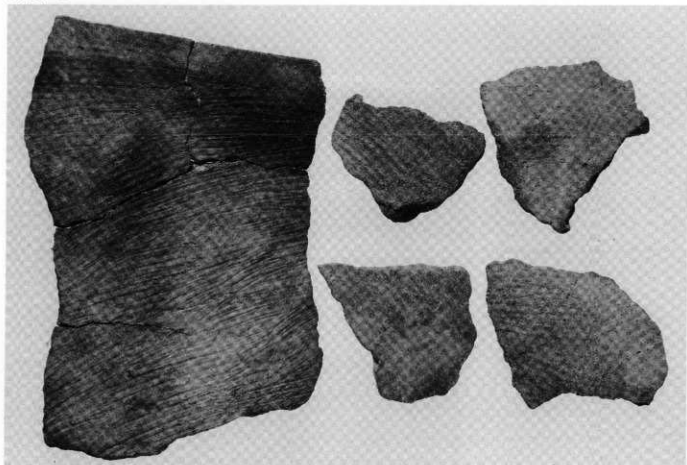


23, 橋脚部分KP1全景
(南から)

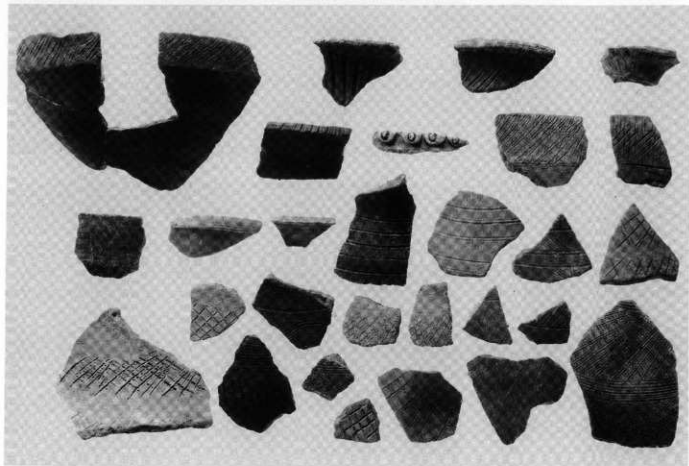


24, KP1 12~18層中
石・木片出土状況

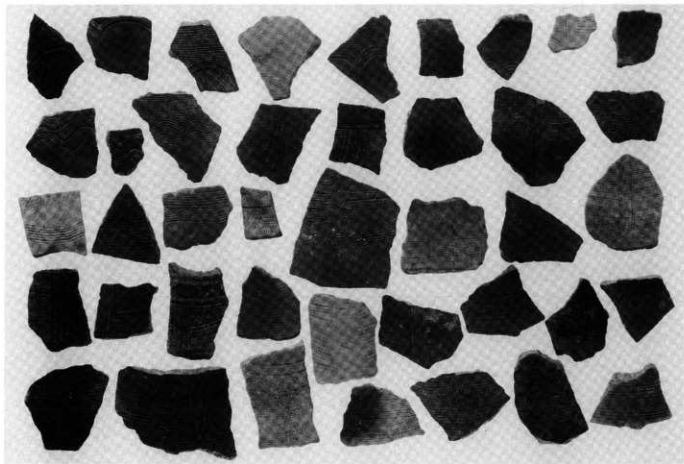




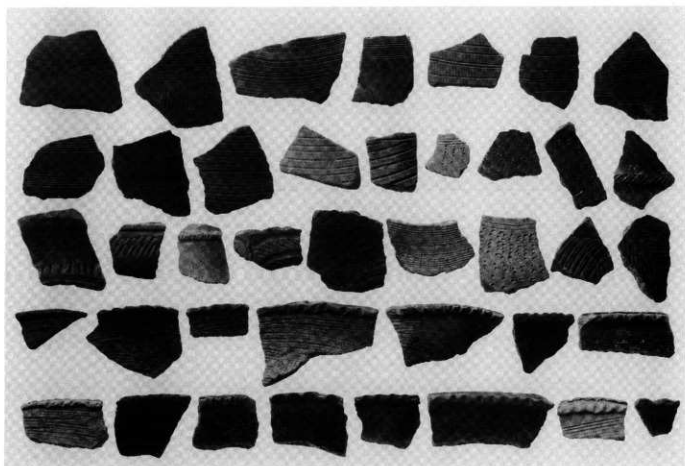
A1試掘坑内出土縄文土器片



A1試掘坑内出土弥生土器片



A1试掘坑内出土弥生土器片



A1试掘坑内出土弥生土器片



楫の身 (A1)



石斧の柄 (A1)



楫の柄 (A1)



舟形木製品 (A1)



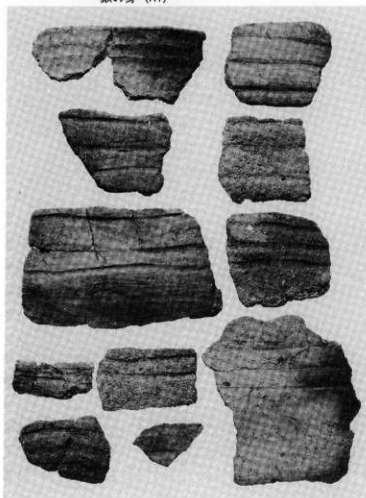
舟形木製品 (A1)



舟形木製品(A1)



舟形木製品 (A1)



縄文土器 (KA2)



石斧片 (A1)



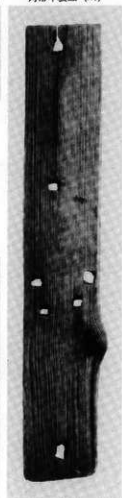
石斧片 (A1)



敲石 (A1)



敲石 (A1)



大足の足板か (KA2)

静岡県埋蔵文化財調査研究所
調査報告 第30集

角 江 遺 跡

平成2年度二級河川新川住宅地
関連公共施設整備促進(中小)工事に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年3月

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地の1
T E L (054) 282-4031